

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻61号 平成20年12月1日発行

「修身教授録」探求（第二十八回） 十三 直ぐにその場で

森 信 三

これからお話し申うそうと思うこの「直ぐにその場で」ということは、勿論男女を通じて大切なことは申す迄ありませんが、しかし婦人にとって特にこの心掛けが必要であろうと思うのです。

即ち或は御両親または夫から言いつけられた事にせよ、或は主婦として当然なすべき事にせよ、その何れにせよとにかく婦人は、直ぐにその場で片付けるという習慣を小さい内から養って置かねばならぬと思うのです。では何故特に婦人にその必要が多いかと申しますと、そもそも女の仕事というものには細々とした小さい仕事ではありませんが、しかしその種類が非常に雑多なものであります。そこで直ぐにその場で片づけ置きかかないと、次々に現われ来る仕事の為に気を取られて、つい先に言いつけられた仕事も忘れて終う事が多いものです。これに反して男子の仕事というのは謂わば専門的でありまして、仕事の種類が女の仕事を程に複雑でなく、随って男子の仕事は忘れて終うという事は女に比しては少ないと言つてよいようです。然るに女の仕事という

ものは、謂わば円の中心から円周上の無数の点に向つて無数の半径を引く様なもので、しかもそれが始終くるくる廻つて次から次へと雑多な仕事が見われてくるものであります。

即ち我が家という一家の中心に立つ主婦に対しては、常にひっきりなしに種々雑多な仕事順序次第もなく次から次へと起つて来る。それ故婦人の仕事はその場その場に時を移さずして行かないと、つい次の事に心を奪われて前の事は忘れ易いものであります。例えば洗濯に出したワイシャツが出来上つて来たとしても、もしそれを直ぐにその場で一応改めないで、そのまま箆筒の引きだしか何かに入れて終うと、洗濯に出す時にはちゃんと着いていたボタンが、洗濯中の手荒らなブラシの為に取れていても、ついそれに気付かないでしまうということにもなります。そこで翌朝主人の出勤間際になつて、さてボタンがついていないとなるのです。そしてそれが時間の遅れている朝などでもあります。僅かにボタン一つのことからも、主人に不快な気持ちを与える事になる訳です。そこで女というものは、常にその場で即座に仕事を処理して行くという心掛けが大切です。例え

ば只今の洗濯物の例で申しても、仕上つて来たらず直ぐにその場で一応調べて見るという事が大事です。それは必ずしもポタンだけではありません。西洋の洗濯というものは、職人の中には随分手荒な事をする者もあるものですから、まだそれ程古くなつて居ない物でも破れていたりする事もあるものです。そういう事などは、仕上つて来た時直ぐにその場で調べて置かないと、翌朝になつてからでは間に合はない事になるものです。

総べて女の仕事は一事に念を入れ過ぎて、他の事を怠るといふ事はよくない事です。男子の場合には自分の専門の一事に凝ると云う事は決して咎めるべきでない処か大いに必要とさえいえましょう。つまり男子の道は直線的だからであります。処が女子の道は前にも申した様に謂わば円的であつて、あらゆる種類の事柄が順序次第もなく、次々に起つてくるものであります。勿論仔細に考えれば順序がない訳ではないのですが、只男子の場合とは余程その趣が違ふのです。即ち順序は確にありはしますが、しかしその種類が非常に複雑で多角的な為に、一寸考えるとまるで順序も何もないかのように見えるのです。例えば御飯を仕掛

けながら一方ではおつゆも煮ねばならぬ。おつゆの実の用意と同時に煮物の仕度もしなければならぬ。同時に又一方ではお風呂もたきつけねばならぬ。夏ならば門前に夕方の打水もしなければならぬ。かと思つてそこへ御用聞きがやつて来る。すると上の子供が二人で兄弟喧嘩をおつぱじめる。その為折角寝ていた赤ちやんまでが泣き出すという騒ぎ。そこへガス会社からガス代を取りに来る。郵便屋が不足料を呉れといふ。ついでに書留の印も捺さねばならぬ。

そこで印と同時に印肉迄が必要となる。そうこうしているうちに猫がお魚を銜えて逃げ出す。かと思えば外へ遊びに出て居た子供がすりむき傷をこしらえて泣いて戻つて来る。斯様に次から次へと種々難多な事柄が引つきりなしに起るのを次々に処理してゆくのが婦人の仕事であります。そこで妙に一つの事許りに凝り込んでそのみに引つかかつて居ますと、次の仕事が無茶苦茶になつてしまふ。そこで女はすべて起り来た事を後廻しにしないで、次々に事を遅らさずに処理して行くという心掛けが大事です。これに反して或る一つ二つの事を満足にしようとして凝り込むと、その間に御飯が臭う。臭つてから馳けつけたんでは

う遅いのです。婦人は常に心を満遍なく一家全体の上に配つて、現在眼の前の仕事を手早く処理するという習慣をつける事がある。あなた方のような娘時代から大切な事でありましょう。

例えて申せば、夕方お勤め先から帰られたお父さまのお靴は、必ずしも毎日靴墨を塗るにも及ばないでしょうが、兎角お父さまのお帰りを玄関にお迎えしたら時を遷さず手早くその場で挨拶を払つて一はけ掃いて置く。この心掛けはやがて自分が家をもつた場合にはおのずから主人の上に行はれます。処がこの心がないと、翌朝忙しい出勤間際になつても、御主人の靴が昨日のままの埃りまみれであるといふような事も出来て来ましょう。すべて物事は時を遷さずその時その場で処理するのが手軽でもあり、又結果から申しても骨折りの少い割に効果の多いものであります。此の事は手紙の返事などの場合には最も顕著であつて、手紙の返事は先方の手紙の封を開いて読んだ直ぐにその場で書けば感じも深く、億劫でもなく、まるで向うから話しかけられたのに返事する様な気軽さで書く事が出来るものですが、少しでも間を置きますと、どうしても感興が薄らいでとかく億劫になり勝

ちなものです。又返事を書くにしても、第一断肝心の実感というものは稀薄になり勝ちなものです。

そこであなた方は、今の中から自分の為すべき仕事は之を延ばさない様に十分心掛ける事が必要でしょう。それには凡て直ぐその場で取り掛かる事が何よりも人切です。そもそも婦人というものは、或る意味ではすべてが八点級というのが理想といってもよいでしょう。学課も手芸もお料理も裁縫も容貌も健康も皆八点級で揃うというのが女としては好ましいといえましょう。そこで仕事の処理の仕方なども、余り一つの事に凝り込んで他を全然うっちゃるとか、乃至忘れるとかいう様では困るのです。そこで先づ八点級で宜しいから、一つも逃さず一つも忘れず、其の場其の場にすらすると仕上げて行くという事が大事です。特にあなた方のような女の身としては……。

さて斯様にあなた方としては直ぐに其の場という事が最も大切な心掛けでありますが、それには第一着手として一体何から始めるがよいかと申しますと、先づ御両親のお言い付け、特にお母さんのお言い付けに対して直ぐにその場で従うという事でありましょう。お母さんから言いつけられた

特「ハイ」と返事はしたものの、さて仲々腰が上らない。二度三度呼ばれて、やっと渋々立ち上がるという風では、そういう人の結婚後つくる家庭の程が今から思いやられます。そこで今のうちから言い付けられた仕事は凡て直ぐにその場です。それが出来ねばその他の事のやれよう筈がありません。例えてみれば主人が外出から帰って来たならば、着物を畳む際は必ずほころびの有無を調べてしかる後に畳むという事なども、婦人として嗜みの一つでありましょう。処がそれを怠つて、主人が着物のほころび等を外出先で直して貰うなどという事があつては、女としてこれ程大きな恥はないでしょう。男子はとかく着物には無頓着なものでありますから、一々主人から言われて始めて直すというようでは、それこそ主人が外出先きで着物のほころびをよその奥さんに直されるというような事にもなりましょう。処が近頃の婦人の中には主人から言われてさえ直ぐにその場で直さない人も少なくない様です。自分には必ず直す積りで居ましても、直ぐに其の場で手掛けねば、何しろ色々雑多な仕事が続々に起つて来る女の身としては、悪気はなかつともつて来ぬかりとなり勝ちなものです。そこで

あなた方は、現在御両親にお母さんのお言い付けが直ぐにその場で従えるようにならないと、その人の将来の結婚生活は必ず物言いが起こると申してよいでしょう。

（「修身教授録」第四卷同志同行社昭和15年刊行）

森信三先生の短文紹介

前号で紹介した論文「第二の夜明け」の続きを紹介する。

論文 第二の夜明け（最終回）

森信三

五、絶対自律への転換

かくして吾人が今回の変革を以て「第二の夜明け」とし、さらにそれを「内からの夜明け」と規定した真意の一端が明らかになったかと思われる。我々にとつて「第一の夜明け」であつた明治維新には、我々の民族は断じてかくの如き悲痛にしてかつ深刻なる生命体験をしなかつた。けだしそれは単に「外に向う夜明け」であつたからである。しかるにこの度の変革はそれとは全くその質を異にする。

それは前述のように、我に課せられた絶対他律を自らの絶対自律として転換することによつてのみその意義の果たされるものであるが、しかしそれは無限なる痛苦の伴うを必然とする。戦いに敗れたそのことがまず無限の悲痛事である。しかし我らの悲痛は、ひとりそれのみに留まらない。我らには敗戦の結果としてさらに幾多の自発ならざる条件が課せられつつあるのである。しかも我らの悲痛は

尚これに留まらないで、この課せられたる絶対的律を絶対自律とすべき絶大なる悲痛が残されている。しかも、我々にしてよくこの悲痛の限界を打ち超え得たならば、我らはそこに真実の歓喜を味わうことができるであろう。

而してこの最後の悲痛は先にも述べたように、我らの民族我の我執の破碎せられる悲痛であるが、しかもこの民族我の我執の破碎には、生命の自覚のための否定的媒介として恐らくは宗教的教説が、その必然的媒介をなすというべきであろう。ここに「恐らくは」という限定的副詞を付したのは、かかる体験は世界史上その前例がなく、今回の変革に当てる我が民族を外にしてはおそらくは人類そのものにとつても全く未経験の事柄と思惟せられるが故である。しかも理由はそれのみに留まらない。さらに今ひとつの理由として、従来地上に出現したあらゆる宗教は、個としての生命の自覚転生のための否定的媒介ではあったが、かかる民族的生命そのものの自覚転生の媒介としての使命を直接その本質とするものでないとともに、また実にその現実的経験としても如是の経験を有しないことが挙げられるのである。かくして今や我々の当面しつづめるこの巨大なる変革は正に語の真義における世界史上空前なる民族生命における宗教的経験と言われるべきものであろう。しかも有限的生命の自覚転生には……民族の生命と言えども、有限性を免れるものではない……必然に否定的媒介を要とし、而してそれは現実には結局既存の宗教的教説に

求めるほかないであろう。我が民族が今や経験しつづめるこの巨大なる生命転生の体験は、今後もし我らと同様の立場に立たしめられる民族ありとしたならば、その記録はおそらくはいかなる既存の宗教的教説よりもさらに端的深刻にその民族的生命の自覚転生の媒介たり得るはずであるが、しかし吾人は世界史の将来においてかかる民族が果たしてあり得るや否やについては現在のところ確たる否定をなしえない。かくして我らが現在当面しつづめる民族生命の自覚転生のために媒介となるべきものは、畢竟既存の宗教的教説のうちに求めるのほかないであろう。而してかかる宗教的教説としては、仏教教説もその本質においては何ら遜色を有するものと思われないが、しかも今日の時代的現実としてはキリスト教のそれがより適切であり、否ほとんど絶対的意義を有するかに思われる。何となれば仏教はその深き宗教性にもかかわらず、否むしろその深邃性のゆえに、生命の縦の展開系列を主本とするわが民族の世界観人生観と結合して……その移入当時多少の動揺はあったが……近世に入ってわれに特有なる家族制度と結びついて、この縦の生命系列の凝固固定（これがいわゆる封建制と呼ばれるものであるが）を破碎するの力を喪失しているが故であつて、今回の敗戦については、仏教もまた、少なくとも仏教徒自身の自覚としては、その責めを免れぬものと思われる。

かくして今やこの最深の敗因としての生命の縦の展開系列の凝固を破碎するものとしては結局キリスト教の真理の洗礼を受ける外な

いであろう。我らが現在当面しつづめるこの「第二の夜明け」を真に「内からの夜明け」としてまことの新生たらしめるか否かは竟にこの一点に窺われると思われる。

（「開頭」創刊号昭和22年2月号から）

あとがき

本文のみで紙幅が尽きた。次号で「第二の夜明け」サマリーと「開頭」20号の「微言」中、「原爆」を中心とする言葉を再掲して、森信三先生のお考えが奈辺にあつたのか、愚生の可能な限りの考察を試みたい。（二繁）

HPは <http://web1.kcn.jp/syusin/>

T6330003

桜井市朝倉台東二丁目五三八一八九

TEL・FAX 0744-4513422

TEL 0744-4513422

E-Mail: hiji@ken.jp

「かよう会」のご案内

日 時 平成20年 12月16日(火)
18時30分～
(毎月第三火曜日原則)
場 所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686
交 通 地下鉄：四つ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。徒歩約
「長堀鶴見緑線線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円(大きな書店で購入)
12/16「敬について」
1/20「ねばり」
2/17「批評的態度というもの」
参加費 1000円